阿 波 の ま ち な み 研 究 会 報

2023 年 11 月号

vol.346

■第2回　三好市旧熊谷家住宅調査報告・・・・・・・2～3

■静岡の古建築見学記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4～7

■事務局通信　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

阿　波　の　ま　ち　な　み　研　究　会

〒770-0931　徳島市富田浜 2-10　(公社)徳島県建築士会

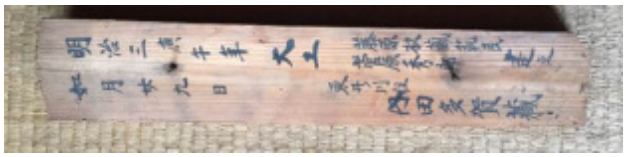
phone：088-653-7570　　fax：088-624-1710

第２回　三好市　旧熊谷家住宅

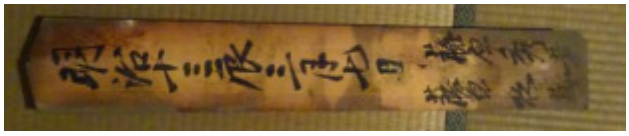
調査報告

代表幹事　坂口敏司

当初は２階建てと伝わるが、棟札も２階の梁に取り付けられており裏付けられた。



明治 13 年(1880)に 3 階建てに増築。3 階屋根棟木に取り付けられた棟札による。



昭和中期以後に屋根瓦の葺き替えが行われ、外壁はﾌﾟﾘﾝﾄ鋼板張りとし、１階建具はアルミサッシに取り換えられている。

昭和 30 年代の写真には２階の両袖にウダツが見られる。また、２階窓も格子が見られるが現在は無い。

木造３階建て入母屋造桟瓦葺き、１階、２階屋根は平入り切妻造桟瓦葺き、外壁は漆喰塗、３階窓は虫籠窓とする。破風の拝みには、鰭付きの蕪懸魚を付ける。１階軒は、出桁造とし、軒を深くする。雨戸戸袋は、腰は洗い出し仕上げ、上部は黒漆喰塗とし、縁は白漆喰で仕上げる。

サンガイ　床の間

内部は、増築した３階をスキップフロアーとし、奥を「サンガイ」と呼び. ２階床から階高の半分程に床を上げる。街道側を「ヨンカイ」と呼んでいるが実際は３階である。「サンガイ」は８畳と４畳の２間続きの和室で、床の間、違い棚を街道側に配置し、中庭を望むように濡れ縁を設ける、北側には書院風の窓を設け出格子を付ける、吉野川が望める設えとしている。

違い棚は、４段に高さを変え３か所に筆返しを

サンガイ　書院風の窓

違棚の透かし彫り

付け、その下の蝦束と壁の隙間には、それぞれに松、竹、梅に透かし彫りした板を填めた、凝った意匠としている。８畳と４畳の堺には４枚建ての襖を入れ、８畳側は漢詩の墨書を張り、４畳側は墨絵を張る、欄間には草花を透かし彫りした板を填める。「ヨンカイ」は、細長い５畳の和室とする。２階は、10 畳の和室の押入が付く、1 階は街道側から土間、和室 7.5 畳のミセ、４畳のナカノマ（２階への階段を付）、イマと続く。

階段　２階（サンガイの入口が見える）

ヨンカイ

辻町では繁栄ぶりを建物で競ったと伝えられ、唯一の街道に面した３階建ての建物で、内部も４層に床を設けた特異な構造とし、「サンガイ」も装飾に凝ったもので、その繁栄ぶりが伝わる明治初期の辻町を代表する貴重な建物である。

倉庫　妻面

倉庫は、敷地の最奥に位置し、敷地間口に並行して建つ。間口３間、奥行 2.5 間の規模で１階を倉庫、２階が住居、１階床下部分を物置として使用する。

建築年代は、２階床梁の材が、盤に加工され整然と組まれており、また、変色が余り進んでおらず、棟札による確認はできなかったが昭和中期の建築であると考えられる。前所有者の熊谷幸三氏からの聞き取りによると昭和 38 年の建築とのことであった。

倉庫　中庭面

昭和 48 年に２階を倉庫から客間として内装の改修が行われている（前所有者の熊谷幸三氏からの聞き取り）、屋根瓦の葺き替え、外壁プリント鋼板張りも行われている。

木造２階建て切妻造桟瓦葺き、外壁は１階東面の中庭に面しては真壁とし漆喰塗とする。その他は全て波板鋼板張りとする、但し東面２階はプリント鋼板に張替ている。

内部は、１階は間口３間、奥行 2.5 間の１室で、北側に階段を付ける。床は板張り、壁は土壁中塗、天井は床組床板表し、東側の中庭に引違戸で出入りする。居室棟とは土間で接続する。２階は、2.5 間角の 12.5 畳の和室で、北側から入る、東側は居室棟と廊下で繋がる。床は畳敷で、壁は繊維壁塗り、天井は化粧合板底目張り。床下物置は、敷地の高低差を利用したもので、中庭から階段で入る。

乾物販売用の倉庫として、湿度対策で床下を高くとり、床板を張った倉庫で主屋と共に、繁栄ぶりが伝わる、昭和の貴重な建物である。

第 10 回ヘリテージマネージャー大会

静岡の古建築見学記

島田　めぐみ

去る 10 月 26 日（木）～28 日（土）にかけて、全国ヘリテージマネージャー連絡協議会の第 10 回静岡大会に参加してまいりました。その際に見学した静岡県の古建築物について、報告したいと思います。

まず、ヘリテージマネージャー総会が行われた建物でもある静岡市役所静岡庁舎本館内を見学させていただきました。

【静岡庁舎本館　建物概要】

建築年：昭和９年(1934 年)
設　計：中村與資平（なかむら　よしへい、浜松市出身の建築家）
構　造：鉄筋コンクリート造４階建て
改　修：昭和 61 年(1986 年)から平成元年(1989 年)、耐震工事及び改修工事を実施
登　録：平成８年(1996 年)国登録有形文化財

現在でも１階は市民ギャラリー及び執務室として、２階～３階は市議会議場、４階は傍聴席及び会議室として使用されています。

うっかり外観を撮影するのを忘れていたのですが、中世スペインの聖堂に見られるようなドーム状の望楼が目を引きます。（気になる方はネットで検索してみてください。）内部も、やはりアラゴンのムデハル様式に着想を得たような、格天井の美しい装飾がみられます。

正面玄関ポーチ上部の天井装飾

１階ホールのシャンデリア（かわいい♡）

ポーチや玄関ホール、議場の傍聴席天井は薄い水色とベージュを基調としたやわらかい色調で、シャンデリアのかわいらしいデザインとも相まってとても女性的な印象を受けました。

議場天井とシャンデリア
奥に傍聴席の天井がちょっとだけ見えています

議場正面は格式を感じる重厚な設え

そして、静岡といえば登呂遺跡！弥生時代の水田と竪穴住居、高床倉庫跡がはじめて一緒に発見された日本考古学史上たいへん重要な遺跡です。（余談ですが、我々の学童期には教科書で習いましたよね？ただし、最近では教科書での登呂遺跡の記述はほとんど見られなくなったそうです。かつては登呂の遺構から「本格的な稲作が始まったのは弥生時代」との説が有力で我々もそう習ったと記憶しているのですが、現在では日本での稲作の起源はそれよりもかなり遡るとされており、登呂は重要視されなくなってきたのだとか。聖徳太子も消えるし、うかうかしていると“過去”はどんどん書き換えられます。）

本題に戻って。登呂遺跡は想像に反して街中の住宅街のすぐそばにありました。同じ弥生時代の遺跡である吉野ケ里遺跡や荒神谷遺跡とは違って、復元住居のすぐ後ろにマンションが立ち並ぶ様子はなんだかシュールです。

古代米が植えられた水田と復元住居

そして何より驚いたのは、最も大きな復元竪穴住居がコンクリート製だったこと。葺き下ろした萱も入口の板もすべてコンクリート。これが実によく出来ていて、間近で目を凝らさないと判別できないくらいでした。萱場も減少し、萱を手に入れるのは至難の業と聞きますし、コストも多大。遺跡を視覚的に体験的に理解しやすいものとして現代に残していくためには、致し方ないのかもしれません。そもそも竪穴住居の上屋部分は、出土品などの物的証拠がなく（柱や屋根葺き材は腐朽してしまうためほとんど残らない。）青銅器などに描かれた線描画や近隣諸国の住居などを参考にして再現されたものであることを考えると、再現の真正性はあまり問題とはされないのでしょう。ちょっと複雑な気分にはなりましたが。

こちらは萱葺き（たぶん）

さて、次に訪れたのは掛川市の日坂（にっさか）宿です。本陣跡や旅籠が立ち並んだ街道沿いは全長 700mほどで、東海道の宿場としては規模の小さい宿ですが、問屋場（幕府公用の交通や流通事務を管理するための施設。多くの伝馬や人足の取次所であった。）が置かれており、重要な宿場であったようです。また大井川の川止めの際などは大勢の宿泊客でおおいに賑わったと記録されています。天保 14 年（1843 年）の文書によると本陣 1 軒、旅籠屋 33 軒等、168 軒の家があり、750 人が住んでいたそうです。今では本陣は敷地のみが残されており、門だけが再建され往時を偲ぶことができます。

今も残る旅籠のうち、２軒は土日だけ解放されており、内部の見学が可能でした。地元のボランティアガイドの方の説明によれば、日坂宿は江戸時代後期の嘉永年間に大火により殆どの建物が焼失し、現在のものはその後に再建されたものとのこと。見学させて戴いた「川坂屋」と「萬屋」も、どちらもその時期に建築されており、江戸時代後期の旅籠の様子がよくわかる建物でした。

【川坂屋　建物概要】
構　　造：木造二階建て　本瓦葺き　切妻平入
建築年代：嘉永５年（1852）頃か
建物種別：旅籠
修理工事：平成 12 年（2000）修理工事
登　　録：掛川市指定有形文化財

かつての敷地は 300 坪以上あったそうですが、国道の開通にともない分断、縮小し、建物も一部減築されています。しかし江戸から棟梁を呼び寄せて造らせたと伝わる端正な造作と繊細で美しい建具は、一見の価値ありです。また当時は庶民の使用が禁じられていたヒノキ材を使った上段の間があることから、武士や公家も宿泊した格の高い旅籠であったと思われます。

武士が宿泊した格の高い旅籠屋だった「川坂屋」
すぐ後ろに国道１号の高架道路が走る

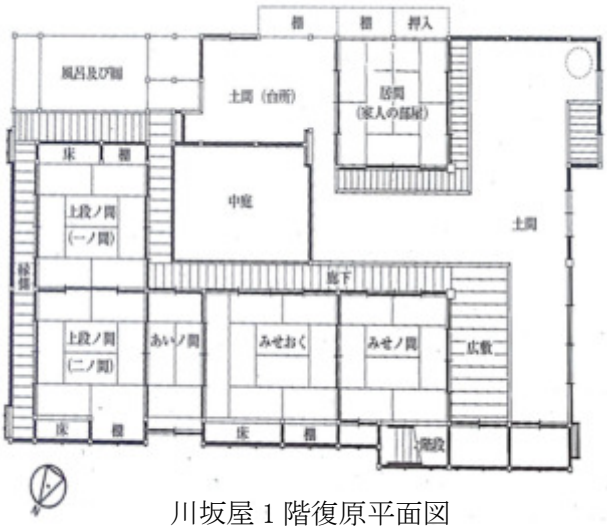
帳場が置かれた広敷からみせノ間を見る

西郷従道（隆盛の弟）の書
川坂屋には明治初期の偉人の書が多く残る

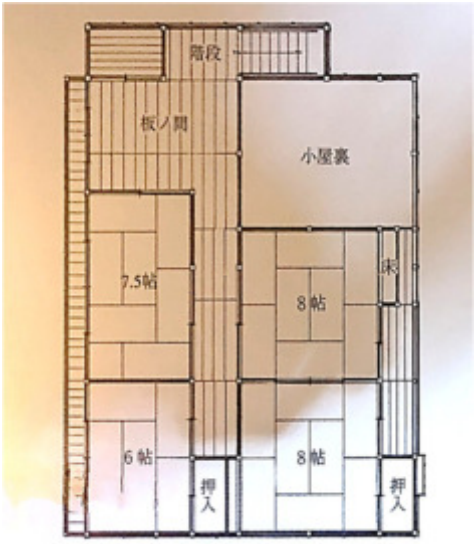
山岡鉄舟の書が襖に仕立てられた「上段の間」

繊細な組格子

旅人に茶を振舞った土間の竈



川坂屋１階復原平面図



川坂屋２階復原平面図
上段の間の上部には２階は乗っていない

【萬屋　建物概要】
構　　造：木造二階建て　本瓦葺き　切妻平入
建築年代：安政３年（1856）頃か
建物種別：庶民旅籠
修理工事：平成 13 年（2001）修理工事

川坂屋が武士や公家も宿泊する上級旅籠だったのに対して、萬屋は庶民の利用する素泊まり専用の旅籠だったようです。

川坂屋のように凝った意匠などは見られず、宿泊室として使用されていた２階の座敷も雑魚寝が基本であったようで、川坂屋のように中廊下で独立した部屋が並んでいるのとは対照的に、広い座敷が４間開け放てるように配置されていました。

上級旅籠と庶民旅籠の両方が残っており、それらを比較して見ることで、当時の社会の有り様や旅の様子などを垣間見ることが出来る貴重な場所でした。

萬屋正面。１階の開口部は蔀戸。

通り土間がなく、広い上がり框が特徴的

２階座敷。奥の二間は修復されていなかった。

【事務局通信】

令和５年９月例会の報告

◇令和5年月9月 15 日(金)17:30～
建築士会会議室
まち研だより発送作業：坂口、真鍋、
丸山、島田
◇令和５年７月 19 日 (金)18：30～ 例会
建築士会会議室
坂口、谷中、林、真鍋
丸山、島田
◇万福寺見学会について
◇川島町の古民家調査について

令和５年 10 月例会の報告

◇令和５年 10 月 20 日(金)18：30～ 例会
建築士会会議室
坂口、林、真鍋、丸山、島田

◇２月実施予定の県外見学会についての行程等の打ち合わせを行いました

県外見学会 参加者募集のお知らせ

◇大阪方面への県外見学会を実施します。参加ご希望の方はまち研会員までお申し込みください。今回は、藤井厚二設計の八木市造邸と、国内最古の酒蔵をもつ伊丹市の旧岡田家住宅・酒蔵などを見学します。定員がありますので、参加希望の方はお早めにお申し込みください。

実施日:令和６年２月 17 日(土)
見学先:香里園・八木邸(藤井厚二設計)
旧岡田家住宅・酒蔵(重要文化財)
旧石橋家住宅(県指定文化財)
定 員:15 名程度(八木邸の見学可能人数)

旅 程: 8:00 徳島駅前集合
11:00 八木邸見学(解説有。所要時間 1 時間程度)
12:30 MIRAIZA 大阪城にてランチ
15:00 伊丹市立伊丹郷町館他見学
19:00 徳島駅前帰着

※旅程は暫定であり、昼食会場等、変更がある場合があります。
※参加費等は確定次第、お知らせします。

↑八木邸(八木邸 HP より)

令和５年 12 月例会について

◇令和５年 12 月の例会は、第３金曜日が(公社)徳島県建築士会の祝賀会と重なっているため現在のところ日程その他について未定です。決定次第、ML 等でお知らせします。

編集部より

☆原稿を募集しています。送付は原稿送付は以下まで。
Mail: m-style@mb.pikara.ne.jp

《まち研だより》2023 年 11 月号 VOL.346 号
発行日 令和５年 11 月 17 日 (金)
発 行 阿波のまちなみ研究会
〒770-0931 徳島市富田浜２丁目 10
(公社)徳島県建築士会
TEL.088-653-7570 FAX.088-624-1710
代表者 坂口敏司(坂口建築設計室)
事務局 真鍋憲資(studioKEN)088-635-4272
studioken@mc.pikara.ne.jp
編集者 島田めぐみ(M-STYLE 設計室)
谷中俊裕(阿南工業高等専門学校)